

“慣れる” その前に

森兼千枝子

「駄目じゃあないの、浮輪につかまっただけで慣れるのは、習ったのでしょおっ」

甲高い声に驚いてプールサイドで子どもを見ているお母さんらしき女性、怒られたのはわたしの目の前で水色の浮輪を両腕でしっかり抱え込んでいる六、七歳の男の子、わたしと目のあった瞬間

はにかむようにニコッと笑った。その笑顔に連れてか浮輪をつかんでぐいぐい引張ってプールの中程までいった、あの声から逃げるように。

「僕、スイミングスクールに行ってるの？」

「うん。でも好きじゃあないんだ」

「そう、おばちゃんも行っているの、一年ぐらい

になるかな。……どうして嫌いなのか」

「だって水の中、怖いんだもん」

「今、水の中にいるじゃあないの、足だって届かない深さだよ。まあいいや、遊ぼう」。二人はプールサイドに近づかないように真夏の太陽を頭上に浴びながらはしゃぎまわった。遊び疲れた二人はいつの間にかプールの壁ぎわの浅いところにきていた。浮輪をはずしてジャンケン遊びに興じた。

「水の中でやってみよう」

「うん」

「顔も水の中だよ」。なかなか沈めないで、手を繋いだ。それまでは勝ったり負けたりだったのが水中だと私が勝ってばかりいる。それもその筈、相手の出したグーを見てチョキだった私がふざけてパーに変えても相手にはわからないのです。ベソかいて泣き出しそうな顔をする。

「水の中でわたしの手が見える？」

「見えない。暗いもん、やめた」

「一寸まってよ。どうして暗いの、目つぶっているの」「うん」「じゃあ、もう一度」。水中でよく見ると目をかたく閉じているのです。

「両手を繋いでもぐるろ、そして私のお顔を見てね」。一・二・三と思い切り沈んだら二人ともプールの底にお尻をぶつつけました。おもわず水の中で笑いました。

「おばちゃんが見えたよ」

浮き上がった二人は大声で笑いました。もう一度、もう一度、と遊び興じたのです。

「あっちへいこう」と向こう側へ泳ぎだしたのは、浮輪をもたない男の子でした。あわてて、水色の浮輪をプールサイドに放りあげ、私も泳ぎました。いったり、きたり、何度も、何度も泳ぎました。ずいぶん昔の事ですが、私には忘れられない

い夏のある日の旅先での思い出です。

その頃、私は定年五十五歳の節目にあたって越し方を振り返る日々が多かったと思います。その中でスポーツに関すること、運動嫌いは生まれつき運動神経の鈍さによるものと決めつけていたことに気づいたのです。ゴルフも駄目、テニスも駄目、卓球さえも駄目、運動らしき事といえば、山歩きぐらいのもの、子どものころ運動会が大嫌い、体操の時間になると頭が痛くなったり腹痛がしたり何とか理由をつけて見学に回ったものです。

そんな私が、放課後、ことに夏休みなど一日中遊び惚けた故郷の小さな川を思い出したのです。

「水泳なら出来るかもしれない」

スイミングクラブに入ったのが一年後の五十六歳のときです。それでも、何度かプールの観覧席から眺めては逡巡したものです。

スイミングは週一回のスクールからはじめまし

た。会社の仕事は引き続いてやっておりました。

その帰りの道のプールを選びました。初めのうちは興味本位、そのうち、義務感みたいなものにつられてスクールに通いました。スイミングスクールの日になると水に入りたくなくなって自分の体に気付きました。でも飽きもきました。飽きたのではなくて嫌になったのかもしれない。義務感みたいなもの、あるいは、お金を払っているという欲からか、スクールに通うことには慣れましたが、嫌になりました。教えてくださることが出来ないのだから……。

そのころ、あの男の子に会ったのです。無心に遊びながら、でも、勇気を出して、水の中で言われるままに目を開けたのだと思います。

私の出来なかつたのは息継ぎです。水に慣れていたのでキックの仕方を覚え、プールの仕方、水のかきかたを覚えた私は、二十五メートルのプールを

呼吸もしないで泳いでいたのです。だから苦しいのです。慣れるどころではありませんでした。

無心になろう、無心になろう、そして勇氣を持つとう、水着に着替えながら呪文のように唱えたものです。教えられるまま無心になって泳ぎました。呼吸の仕方に慣れたのは言うまでもありません。

スイミングにはこれで良いものはない、ひとつ出来れば次の段階がある、次の段階が出来ればその次の段階、その度に無心になって勇氣をもって、毎回この繰り返しです。次ぎ次ぎの段階を追っているときばかりではありません。「六十の手習い」の悲しさ、教わったことを忘れてしまうのです。無心、無心、勇氣、勇氣はこれからも続くでしょう。そして飽きたとき、嫌になったとき、それは無心になることを忘れたとき、勇氣を持つ氣力がなくなった時だと思えます。僅かでも

いい、そのなかで体に慣れてくれるものがあればいい、それが私の泳ぎなのです。水泳を初めて十一年目になりました。まだまだ習い覚えなければならぬことが尽きないほどあります。それなのに情性で泳いでいるときもあります。「なぜ泳ぐの」、自分に問いかけてみます。「わからない」。

慣れて泳いでいるのでしょうか。そんな時、もし私が子どもだったら何と応えるかしら、そう、理屈はいらないのです。また、ある時は、教えてくださる泳ぎのテクニクが出来なくて情けなくなったり、スピードがなくてタイムがおそく落ち込んだりします。私は忘れているのです。無心になること、勇氣を持つこと、そこが発点だからです。

「おばちゃんにご挨拶は」、やさしいおかあさんの声。「おはようございます」「おやようございます」「おはよう。いってらっしゃい」。朝の出掛け

によく合う近所の母子連れです。無心に交わす大人と子どもの挨拶です。これが小学生、中学生と成長したころは、どうなっているでしょう。さらに、成人となつてからも「挨拶もできない奴だ」と嫌われることもままあります。でも、幼いころはできていた筈です。成長に連れて自我の芽生え、羞恥心、疑義などが妨げになっているのではないのでしょうか。こんなとき無心になればいいなあ、無心になることに勇気を持てばいいなあ、私は思います。

「華の会」は働く女性の水泳教室です。社会の第一線で活躍している方々が、「もっとキックして」「腕を伸ばして」。コーチの声に一生懸命です。水着姿になるのさえためらいがちだったのに水に浮くことも潜ることも慣れて、喜々として泳いでいるのです。勇気を持つことも、無心になることもごくごく自然なのです。初級、中級、上

級と進むにつれて新しいテクニクを体に慣れさせなければならぬ。途中から仲間入りした私は少しばかり泳げるからといって慢心していたわけではないけれども、見習うべきことの大事さを改めて考えさせられました。子ども心にかえて無心にコーチの言われるまま手を動かし足を動かし泳ぐことにしています。苦しいときもあるけれども、楽しいこともある筈、いつの日かきつと素晴らしいスイマーになれるだろう、そんな夢をもつて楽しく泳いでいます。

「慣れる」という動作には必ずその前がある、それを無心に受け入れ、勇気を持って実行する、これがはじまりだと私は思います。歯を磨くこと手を洗うこと、お辞儀をすること、誰かが教えてくれたり、見よう見まねであったとしても、素直な心、無心、遊びの心の中で与え、受け入れることが「慣れる」ことへつながっていくのではないで

しょうか。無心に受け入れ、実行したことから当たり前の事として身につくのではないでしょうか。もちろん「悪いことへの慣れ」にも通ずるものがあります。それをどのようにして与え、育て

成長させれば良いのか、還暦をとうに過ぎた私が苦手「スイミング」をとおして深く考えるものがあることを痛感しております。

(華の会)

慣れるには

考えることと時間が必要

鈴木 洋